
儀礼により生成される完全なる身体

——中世密教の“非正統的図像”と修法をめぐる——

ルチア・ドルチェ

〈ロンドン大学・SOAS 日本宗教研究センター〉

本論文では、中世仏教の解釈学の問題について論じたい。日本宗教史の中でも、中世仏教は比較的よく研究されている分野であり、重要なテキストはすでに何度も解釈されていると思われるが、しかし、中世仏教の中でも中世密教については、大量の文献が各地の寺院や個人コレクションに眠っており、すでに公刊されたものでも、その意味するところを詳しく分析し、全体の中で位置付けるには、なお研究が必要なものもあまた残されている。解釈の動向は、必ずしも研究に内在的な課題に従うだけではなく、宗派的な正統性の確立や社会的・政治的な動向にも左右されるものであり、いつも望ましい方向に進むわけではないということも考慮されねばならない。最近では、いわゆる伝統的な仏教学や仏教史学とは別の分野から、新しい研究の機運が高まり、未知だった部分に新たな光が当てられるようになっている（この研究集会も、そうした新しい研究の機運をよく示すものである）。今回は、とくに真福寺経蔵の調査をはじめとして新たに発見されたいくつかの儀礼のテキストをめぐる検討したい。

パフォーマティブなテキスト

まず前もって考慮すべきは、こうした宗教テキストの分野では、仏教のテキストは教相（教学）と事相（儀礼）との二つのカテゴリーに分けられているが、大部分の中世密教のテキストは、狭義の儀礼次第を述べるものに限らず、大部分は儀礼の文献である、ということである。教相について相当に詳しい説明をするものもあるが、大多数は印明や観想などのパフォーマティブな行為が中心になっており、また尊像として崇拜の対象となる多くの図像を含んでいる。図像の中には、思想的内容をイメージの形で結晶化させるものもある。また、そこには、政治的、宗教的な正統性を示すさまざまな要素が含まれ、最高位の僧侶だけしか知り得ない「甚深の秘密」とされて、それ自身の宗教的価値が強調されている。さらに、それらは、各種の法流や行者の間の非常に流動的な状況の中で生み出された産物でもある。

これらのテキストのうち或るものは、中世日本で新たに創始された儀礼について述べたものである。それらは当然、古典的な典拠やそれ以前の文献には見出すことができない。これほど多くの新しい儀礼テキストがなぜ、どのように作られたのか、ということは大きな問題である。それを理解するには、いくつかのレベルでの解釈が可能である。社会的・歴史的な観点から考えるなら、これらの儀礼テキストは、他には知られない「秘密」の知識を伝えるものとして、細かく分岐した法流の存在を正当化するものであり、また、宗派内に限定されない政治権力の力学を示すものでもある。一方、宗教的・哲学的視点から言うならば、これらの儀礼は、密教儀礼の実修を通して得られる力についての新しい解釈を与えるものである、ということもできる。

「三尊合行法」とそのテキスト

こうした中世の新しい儀礼の中で、今日論じたいのは、いわゆる「三尊合行法」と呼ばれる儀礼である。

これは、不動と愛染という二明王と如意宝珠を組み合わせた儀礼である。この儀礼については、いまだ十分に解明されていないが、現在知られているテキストから、およそ次のようなことが言えるであろう。

- 一、制度上から見ると、この儀礼は、醍醐寺を中心とした小野流の中でも、とくに三寶院流という法流を中心として作り上げられた。
- 二、内容と形式を見ると、この儀礼は自然から得られる二元的なカテゴリー（たとえば太陽や月、男女を表す白と赤という色のコード）をさまざまに組み合わせて成り立っている。思想の上では、三つの尊格を組み合わせることで表現される絶対的の一元論、あるいは「不二」性を強調するものである。
- 三、この儀礼はいくつかの中国の仏典、とくに『菩提心論』や『瑜祇経』、さらに空海に仮託された日本の聖典『御遺告』を典拠にしていること。この儀礼について述べる文献のいくつかは、これらの典拠に対する、図像入りの注釈書でもある、という性格をもっている。
- 四、それらの写本に見られる図像の多くは、一般的な密教図像とは異なった、いわば「非典型的」、あるいは「非正統的」な図像で、新しい意味の次元を表現するために伝統的な図像に意図的な変更を加えたものである。
- 五、これらの儀礼は、内容としては、伝統的／正統的な観想の儀礼を含むが、同時に、儀礼を通して変化し、聖なる力を得る人間の体もしくは身体性にとくに焦点を合わせることに特徴がある。それによって、解脱に至る過程が一種の胎生学的な言説によって表現されるようになる。新たな身体として生まれ出る過程が、即身成仏の過程のメタファーとして述べられるわけである。

三尊合行法は、14世紀にはすでに完成された形になっているようである。実際、その時代の三尊合行法関係の聖教の幾つかの写本が発見されている。今回とくに中心的に論じたいのは、『御遺告大事』、別名『東長大事』と題されている文書である。『御遺告大事』は、空海に仮託された『御遺告』に関する「大事」であり、『東長大事』とは、東寺長者にとっての「大事」という意味で用いられている。これは、三尊合行法に関する教義的、図像的な内容を詳しく伝える重要な書物である。道順（?～1321）の口伝を文観弘真（1278～1357）が記した、とする識語があるが、実際は、文観自身による1327年の著作と考えられるようである。『御遺告大事』と似たような言説で三尊合行法について述べるもう一つテキストは、1338年に文観により著された『秘密源底口決』という文献である¹。ただし、これは冒頭に「一仏二明王」の図像の位置関係を述べた一節がある以外は純然たる文字テキストで、図像は含んでいない。これ以外にも真福寺大須文庫には『一二寸合行秘次第』『Sam suram 合行秘決』『当流最極秘決』などの文書が残される²。

『御遺告大事』にはいくつもの写本が存在する。最古のものは、群馬県の慈眼寺に蔵されている1372年の写本である³。芸術的には最も優れたものであるが、残念ながら冒頭が欠けている。現在、実践女子大学蔵の山岸文庫に収められた写本が、影印で刊行され、これは完本なので貴重である⁴。それ以外にも、智積院や随心院、高野山の親王院（この写本の図像が水原亮栄師によって刊行されている⁵）、また同じ祖本に基づくと思われる仁和寺蔵の写本⁶などがある。

1 本書には、いくつもの写本が存在する。例として、渡辺匡一氏「善通寺蔵『秘密源底口決』翻刻・紹介」『善通寺教学振興会紀要』6、1999年2月、118～130頁参照。

2 『御遺告大事』と『秘密源底口決』は、複数の寺院に写本が残っているので、より広く知られているが、この三つの資料は、現在まで真福寺だけで発見されている。『Sam suram 合行秘決』（「Sam suram」は梵字で、「三尊」の意味）と『当流最極秘決』は未翻刻である。『一二寸合行秘次第私記』（「一二寸」は「三尊」の秘称）は影印と翻刻が真福寺善本叢刊第二期第三巻『中世先徳著作集』に収録されている。

3 これは奈良国立博物館の2001年の特別展『仏舎利と宝珠』の図録に写真が収録されている。68頁（カラー図版）、165～170頁（白黒図版・全文）参照。この図録には『東長大事』という仮題が付されている。

4 この写本は、牧野和夫・藤巻和宏両氏による解題と影印が『実践女子大学文学部紀要』第44集、2002年3月、1～38頁に刊行されている。以下にこの写本の頁を参照する。

5 水原亮栄師『弘法大師影像図考』東京、丙午出版社、1925年。

6 この写本は、阿部泰郎氏から複写を借覧したことを記して感謝する。

『御遺告大事』における解釈学的実践

『御遺告大事』は、いくつかの視点から解釈することができる。ここでは、

- a. 真言宗の神話説（空海の神話、室生山の神話）として、
- b. 『菩提心論』に基づく教義・儀礼（観想法）の図像化として、
- c. 三寶院流の正統性を示すための秘密儀礼の文書として、
- d. 完全なる身体を産出する胎生学的過程を記述する文書として、

という四つの視点から考えてみたい。

a. 空海と室生山

何よりもまず、このテキストはその題名からして空海に非常に近い関係があることが明らかである。特に、空海の遺言とされ、実際は10世紀に創作された『御遺告二十五箇条』という文書に関連するものである⁷。『御遺告』については、中世に真言各法流に属する学僧によっていくつもの注釈書が作られている。『御遺告大事』はその一つであるが、『御遺告』全体についての注釈ではなく、最後の三条が主な対象になっている。それらのうち、第二十四条は如意宝珠に関する儀礼が述べられ、第二十三条は「避蛇法」、第二十五条は一種の調伏法である「奥沙子平法」について記されている。これらの内容は、『御遺告』では、すべて室生山（一山）と関連付けられることによって一連のものとなっている。室生山は、東密における如意宝珠の伝承の中で、重要な役割を果たしていた。この三箇条は、室生山に安置された宝珠の伝承とその力を儀礼化したものと言える。『御遺告』には、真言宗の神話で神聖な意味をもつようになった室生山の崇拝を明確に権威づけ、同時に空海の崇拝を推進する言説が認められる。こうしたテーマは、『御遺告大事』でもさまざまな形で反復されている。たとえば冒頭には、空海の非典型的図像が二つ描かれている。ひとつは、少年の空海を象徴する劔と法輪を持った童子の立像で、「因位の童形尊像」と題されている。12歳の時に「昔の仏弟子であった」とされて、空海に対して事後予言が示されることも注目される⁸（図1）。二つ目は、5、6歳のころの「八葉の蓮華の中に坐って」いる形の座像である⁹（図2）。その上に、宗祖としての空海の姿（図3）と空海とその二人の弟子、真雅と実恵の三人が三尊として描かれている（図4）。

今回は空海の図像の分析はひとまず置いて、まず空海の上方に描かれた三尊について論じたい。



図1



図2

7 『御遺告二十五箇条』大正77, no. 2431 参照。

8 『御遺告大事』14頁。『御遺告』の初頭（大正77, 408b18-19）、「爰父母曰。我子昔可佛弟子」を参照。

9 『御遺告大事』16頁。「八葉の蓮華の中に坐って」という文章も『御遺告』初頭の引用である。「生年五六之間夢常見居坐八葉蓮華之中諸佛共語也」、大正77, 408b16頁参照。



図 3



図 4

図 1～4 仁和寺蔵『御遺告大事』

b. 天体の三尊と『菩提心論』

「天体の〔三尊〕」という表題は私に命名したものだが、ここでは、二頭の龍が両側から中央の如意宝珠を支える図が描かれている（図5）。この構成は、摩尼曼荼羅を想起させるもので、その左右に、日輪と月輪が描かれている。宝珠は「明星」（すなわち金星）および「虚空蔵」に同定されている¹⁰。これは、古くから知られた密教修法の一つ、求聞持法に基づくもので、そこでは虚空蔵菩薩が宝珠を持ち明けの明星の形で出現するといわれている。『御遺告二十五箇条』の神話的伝承との関連は、二頭の龍が、室生山で行なわれた調伏法が示す白蛇（避蛇法）と奥蛇に対応されることで、明確にされている。また、童子形の空海の尊像の上に描かれている天体の三尊は、教理的な内容の関連付けも認められる¹¹（図6）。中央の宝珠が三摩地心に、両側の日輪・月輪がそれぞれ行願菩提心（または大悲心）および勝義菩提心に結びつけられている。これらは、『菩提心論』に説かれる菩提心の三つの相であって、密教の修行僧の実践に直結するものである。慈悲を動機として行動し、密教の究極の教えを追求し、すべてを瞑想に基づいて行なう、つまり（身・口・意の）三密によって仏陀との一体性を獲得するということが意味されている。宝珠の上の部分、修行者と心の不二性が記されている。

これら三種類の菩提心は、『御遺告大事』のほかの部分でも、日・月・宝珠と関連付けられて説明されている¹²（図7、8）。つまり、テキスト上では神話上の解釈を提案しながら、同時に密教的修行の意味と修行の効果を考察するのである。

さらに、もう一つの図像では、同じ関係が五輪塔と不動・愛染として表現されている¹³（図9）。これは中央に五輪塔が、その左と右に不動と愛染との図で、「三宝院祖師」の建立による三尊図と題されている。これは、五輪塔の形をもって如意輪観音を崇めたといわれている勝覚（1057～1129）を示すと考えられる。しかし、これも宗派的問題を考慮に入れていない。テキストによる解釈は、菩提心の修法を詳しく説明している。『菩提心論秘決』という注釈書に基づいて（その作者と成立年代は特定できていないが）、これを「三菩提心の三尊合行大事」といい、『菩提心論』を引いて「内心中観」と呼ばれる観想法について述べている。これは、胎蔵界と金剛界の曼荼羅に配された日輪と月輪を観想する法であるという（図10）。

『菩提心論秘決』によれば、『菩提心論』に次のように言う。内心において日月輪を観ずる。この観想を行なうことによって、行者の本心が湛然として清浄であり、満月の光のように虚空に遍じ、分別すると

10 『御遺告大事』20頁。

11 『御遺告大事』16頁。

12 『御遺告大事』34、36頁。

13 『御遺告大事』32～33頁。

図5～10 仁和寺蔵『御遺告大事』



図5



図6



図7



図8



図9

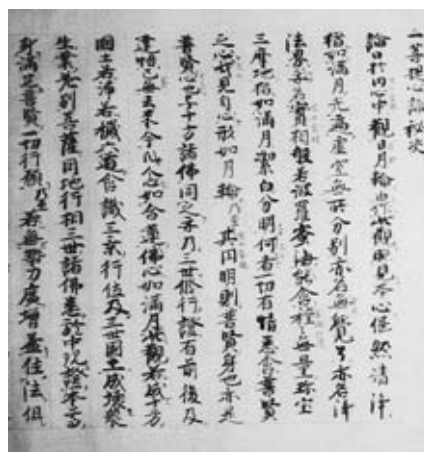


図10

ころがないことを照見するのである。これをまた、無覚了といい、また浄法界ともいう。あるいはまた実相般若波羅蜜の海ともいう。ここには、種々の無量の珍宝三摩地が含まれている。潔白分明なるがゆえに、満月のようなのである。なんとすれば、一切有情はすべて普賢の心を含んでおり、自らの心の形を月輪の如くに見るからである。〔中略〕その円満で明るいことは、すなわち普賢の身体であり、また普賢の心であって、十方の諸仏と同じである。また、三世の修行には前後の違いがあるが、一度悟りに至った者にとっては、過去も現在もない。おおよそ人の心は蓮華のつぼみのようであり、仏の心は満月のようなのである。この観想を成就すれば、十方の国土は浄土であっても穢土であっても、また六道の含識や(身・

口・意の) 三業の行位も、三世国土の創造と破壊も、衆生の業の差別も、菩薩の因地の行相も、三世諸仏も、すべてがことごとく本尊の身体の中に現われ、普賢の一切の行願を満足するのである。¹⁴

これと同様の文言は、他の文書にも見られる。面白いのは、『御遺告大事』は、引用された文章を、右側に朱で傍書して、解釈を加えていることである。これによって、もとの文章に重層的な意味が加えられるわけである。たとえば、今の引用のはじめの部分では、「内心」を「不二宝珠」と解釈し¹⁵、「日」が「台（胎藏）」に、「月」が「金（金剛界）」に、「無覚」が「金界」に、「浄法界」が「台蔵」に¹⁶、「実相」が「不二宝珠」に¹⁷、「種々無量の珍宝三摩地」の「種々」が「宝珠の功德」に¹⁸、「我が自心を見る」の「我」が「不二」に、「其の円明」の「其」が「不二宝珠」によって、それぞれ解釈されている。

解釈学の観点からすれば、こうした語句の注釈は非常に興味深いものである。とくに、ここでは『菩提心論』には見られない三摩地心と宝珠の関係が示されているし、この第三の菩提心の具象的なイメージが明らかにされている。また最初の「日」が胎蔵界に、「月」が金剛界に配当されているが、これは、大正蔵で採用された『菩提心論』の底本では「白月輪」となっている箇所が、異本では「日月輪」に置き換えられていることに基づいている。この解釈によって、行願心が太陽＝胎蔵界に、勝義心が月＝金剛界に関連付けられていると理解できるであろう。

このような解釈を加えることによって、『御遺告大事』は、大乘仏教の根本的な概念である菩提心という抽象的な観念を、密教の具体的な尊格に関連付けているわけである。その中で、愛染と不動の二明王を太陽と月に関連させる考え方は、文観以前からよく知られていたもので、多様な密教法流に属する文献に見ることができる。たとえば、天台座主・慈円（1155～1225）による口決集『四帖秘決』、および守覚法親王（1150～1202）作『追記』と守覚に仮託されている『真俗擲金記』を見ると、不動と愛染は、太陽と月を対象にした儀礼の中で、対として視覚化され、あるいは密教儀礼の中の二つの対照的な相を体現する、という解釈が行なわれている¹⁹。これらは、二元的なパターンに基づいており、その両極が合一して融合するという理解を示していると言える。これは、真言宗の根本的な思考原理である「両部不二」の観念に基づいた、神秘主義的な両極の一致の思想を表していると言えるだろう。しかし『御遺告大事』では、その二元性は第三番目の要素によって乗り越えられ、宝珠や五輪塔、あるいは空海の身体といったさまざまな尊格として表現される。このような表現は、両部不二の理念を中心として展開する真言宗の規範的な教相と事相の関係性を一新する新機軸だと考えられる。

これらの図像で表されているのは、何よりも、修行者の心の状態である。この反復されるテーマは、『御遺告大事』の根本的なテーマであると言える。そこでは、空海の肖像も、三元的構造の中で悟りへ至るプロセスを身体的イメージで表現するものである。たとえばテキストのこの部分の説明の中には、「此ノ無相ノ一心ノ即チ六大和合、理智冥合ノ心也。是ノ故ニ一切万物、皆ナ陰陽和合シテ而モ生ズ各々ノ事ヲ。故ニ事々ノ当体、

14 「[...]」於内心中。觀白月輪。由作此觀。照見本心。湛然清淨。猶如滿月光遍虛空無所分別。亦名覺了。亦名淨法界。亦名寶相般若波羅蜜海。能含種種無量珍寶三摩地猶如滿月潔白分明。何者。爲一切有情。悉含普賢之心。我見自心。形如月輪。[...]其圓明則普賢身也。亦是普賢心也。與十方諸佛同之。亦乃三世修行證有前後。及達悟也無去來今。凡人心如合蓮華。佛心如滿月。此觀若成。十方國土。若淨若穢。六道含識。三乘行位。及三世國土成壞。衆生業差別。菩薩因地行相。三世諸佛。悉於中現證本尊身。滿足普賢一切行願故。」大正32, 573c14-20, 574b20-26頁を参照。

15 この注は、慈眼寺本と仁和寺本にはあるが、山岸文庫本には付されていない。

16 仁和寺本にはない。

17 山岸文庫本にはない。

18 山岸文庫本にはない。

19 『追記』では、護摩の本尊に関して、護摩がこの二明王の三昧を体現するものである、という口伝を記し、「内護摩智觀」は「愛染王の觀」であり、「外護摩理觀」は「不動明王の觀」であると述べている。大78, 618c4-5を参照。一方、『真俗擲金記』には、二明王が「冥合」して「不二の位」にある中で、月輪に住する不動と日輪に住する愛染の觀想が記されている。尊經閣本、乙、三ウ～四オを参照。

全ク理智也。猶ヲ如シ父母ノ生ズル一子ヲ、々々ノ当体全ク父母ナル〔中略〕此レ即チ三尊合行・三部而二ノ法門也」²⁰ というような文を読むことができる。

c. 三寶院流の秘密的儀礼

『御遺告大事』の解釈のもう一つの重要な特徴は、愛染・不動・宝珠の三尊を、醍醐寺の諸法流において重要な位置を占めていた「第三重灌頂」の図像的表現としているということである。これは、決定的に重要な灌頂と考えられ、修行者に最高の力を与えると信じられていたもので、それゆえ、もっとも僧位の高い者しか知りえない「最極秘密」とされていた。『御遺告大事』は、この儀礼を愛染と不動および宝珠の像によって説明している。

初重の灌頂は、「二印二明」の伝授で、月輪と日輪の中に描かれた不動と愛染の別々の像で表される。不動は劔と法輪を持ち、愛染は宝珠と白雲の中の白蛇を持っている。〔ただし、この愛染の像は、忿怒相を現わしておらず、一般の像とは非常に異なる。〕これは、『御遺告』における室生山と空海の伝承と関連付けられるもので、一山に安置された「三寸白銀の不動」の彫像と「五指量の愛染」の尊体を表す、といわれている²¹ (図11)。第二重の灌頂は「一印二明」の伝授である。これは両頭愛染の像によって表されている²² (図12)。最後の第三重は「一印一明」の伝授で、宝珠の像によって表されている²³ (図13)。



図11～13
仁和寺蔵『御遺告大事』

図11



図12



図13

20 『御遺告大事』21～22頁。テキストは、ここで、他のより一般的な三尊像に言及し、脇侍の二菩薩が、真如の二つの相、理と智に当たり、それらが中央の尊格に統合されることを述べる。たとえば「釈迦ニハ分ニ理智ニ為ニ普賢・文殊ニ、薬師ニハ分ニ陰陽ニ為ニ日・月ニ」など(22頁)。

21 『御遺告大事』25～26頁。

22 『御遺告大事』28～29頁。

23 『御遺告大事』27頁。

『御遺告大事』の注解によれば、初重と第二重では、行者は二体とその合体を観想するが、そこには依然として差別が存在し、それゆえ二体の間の二元性が存在する。しかし第三重になると、二体は別々ではありながら一つであり、それゆえに宝珠の形をとるといふ。宝珠は、「此レ行者ノ心身、内心ノ肉団ナリ。此レ宝珠実体也。我身ノ是赤白和合、陰陽冥合ノ体也」といわれている。これは、また宝珠の二分を説明するものでもある。上半は「理」であり、悟りの「因」を表し、下半は𑖀 (VAM) の字になり、「智」であって仏果を示す、という²⁴。さらに宝珠に悉曇文字で種子が記されている。これらは、予想されるような胎蔵界と金剛界の大日を表す𑖀 (A) 字 (上半) と𑖀 (VAM) 字 (下半) になるが、それらだけではなく、五輪塔に記される五大を表す種子である𑖀𑖀𑖀𑖀𑖀



図14

𑖀 (HA, A KHA RA VAM) が書かれている。これは、『大日経』の五輪観（五字嚴身観とも言われる）の修法と関連すると考えられる。この修法は五大、五字、五輪塔の五つの形態、そして行者の身体の五つの箇所（腰下、臍、胸、眉間、頭頂）をすべて関連付けて、即身成仏に至る、というものである。これは、覚鑠をはじめとしていくつもの中世文献が図式化して言及している²⁵（図14参照）。

d. 身体論

『御遺告大事』の別の箇所では、空海の身体が三仏一体の仏陀を表す秘密の身体として解釈され、それが密教の行を修する行者の体と同一である、といわれている²⁶。換言すれば、空海の身体が行者の身体の「鋳型」あるいは「雛形」とされ、行者の身体が儀礼を通して変化を遂げることを示す、というのである。

『御遺告大事』に見られるさまざまな三元的な尊像は、このように、行者の身体が、三尊一体の尊格——空海の三尊も含まれる——によって表象される仏陀の完全な身体と、儀礼によって同一化する、というプロセスを表し、そこに至る観想を示したものであるということが出来る。これらは、不二性や菩提心などの密教の根本概念を視覚的に象徴するばかりでなく、そうした概念を灌頂の印や真言、観想という現実の行によって儀礼化することを図像化して表す「遂行的な解釈」である。このような解釈は、三寶院流の他の書物、たとえば『遍口鈔』²⁷などに見られる解釈や、櫛田良洪氏の『真言密教成立過程の研究』に引用されたいくつかの印信にも共通するものがある。たとえば、称名寺の第二世・劔阿の伝える切紙に、次のような内容のものがある。「二元性は二つの要素からなる。不二であると同時に二であり、深秘である。第三重の不二は、秘中の深秘である。〔中略〕第二重の〔不二〕は躰の不二を〔示す〕一印によって表される。しかし、二つの界〔両界曼荼羅によって表される二つの原理〕があるがゆえに、行者は二つの明を唱える。第三重では、行者は塔印を結ぶ。これは秘密の印であるがゆえに、印を結ぶ時、手を見せない。躰が不二であるがゆえに、一印を用いる。さらに、金剛界を行ずる時には胎蔵界の義があるゆえに、二明を誦する。第四重ではまた塔印を結ぶ。〔中略〕塔印を結び、この明を誦する時、われわれの身体はすなわち五輪の塔になり、われわれの身体はまたすなわちこの明になるのである」²⁸。

これらの文言から、中世における不二性に関する言説は、儀礼のコンテキストにおいて印を結び、明を唱える行為によって、具体的な不二性が成立する、という言説と密接に結びついていることが明らかになる。究極の目的は、宝珠、あるいは五輪塔といった象徴的な要素の形態に結晶するわけであるが、それがいかに

24 『御遺告大事』27～28頁。

25 『五蔵曼陀羅和合記』上・下、鎌倉時代、金沢文庫蔵。金沢文庫編『称名寺の石塔—中世律宗と石塔』2002年、22頁を参照。

26 『御遺告大事』24頁。

27 伊藤聡「三寶院流の偽書—特に『石室』を巡って」参照。伊藤氏がこの論文で取り上げている『石室』も、『瑜祇経』と『理趣経』に基づいた胎生学的な儀礼理論を展開しており、興味深い。

28 櫛田良洪著『真言密教成立過程の研究』東京、山喜房佛書林、1964年、340～341頁。

成し遂げられるか、ということは、はじめに指定され、その最終的な要素を創造するところの二極的な対立要素にかかっている。儀礼の中でのしぐさや法具、図像などに見られる性的なメタファーは、儀礼のプロセスにおいて、観念がたんに内面化されるのではなく、具体的な身体の中で意味をもち、最終的にはその身体そのものを変化させることが目的となっている、ということを強調する機能を果たしているもののように思われる。

真福寺蔵の新発見の資料

真福寺で最近発見された他の文観著作には、同様の言説が繰り返されている。『Sam suram 合行秘決』と『当流最極秘決』がそれである。これらの文献には、ここに見てきたのと同様の、多様な要素間の関連付けが認められる。さらに、そこには悉曇文字や漢字が視覚的に駆使されて、不動・愛染と宝珠、または塔の三位一体関係が図示され、あるいは赤白二滯の和合から誕生する完全な身体のイメージが描かれている。

『Sam suram (三尊) 合行秘決』(一卷)(図15)は、三尊一体の尊格が図式と図像の形で、四つの形式で表されている。まず文字で表される三尊の名前、次に不動を表す劔、愛染を表す宝瓶、そして台の上に載せられた宝珠という形の三昧耶形、次に手の持物で三尊を表す空海の像、そして観想する心を天体のヴィジョンで描いた図である。

最初の文字で表された三尊像は、二つの鏡のような対称形になった図式で表される(図16)。右側のものは、中央に如意宝珠を悉曇文字 (ci[m] ta ma ni) で表現したものを中央に置き、その両側に漢字で不動明王と愛染明王が置かれる。中央の如意宝珠の上に、小さな宝珠の図が描かれ、不動の上には小さな三角が、愛染の上には小さな丸が描かれている。また、その二尊の上には、室生山に関連付けられる二つの修法、避蛇と奥沙の名前がある。さらに、上に見てきた他の関連する要素も、この図式に含まれている。宝珠は、一つのレベルでは『御遺告』の第二十四条と「大定宝」に、また別のレベルでは「内心」に関連付けられている。一方、不動は、「三寸 (の像)」と「大智」、『御遺告』の第二十三条に、また別のレベルでは月輪、理、および胎蔵界曼荼羅に、また愛染は、「大悲」、「五指量 (の像)」および『御遺告』の第二十五条、そして日輪、智、金剛界曼荼羅に関連付けられている。

次の図式は、今見たもののヴァリエーションである。中央の宝珠は、悉曇文字 (ma ni) と漢字の「宝」を組み合わせて、「摩尼宝」ということばを記している。両側の不動と愛染は、前と同様に漢字で表され、その上に同じ三角と丸が朱で記されている。しかしここでは、三宝院流の三重の灌頂に関する新たな情報が加えられている。不動の下には、「伝法灌頂の二印二明の本尊」であり「胎蔵界の三部を合体した秘仏」である、



図15



図16



図17

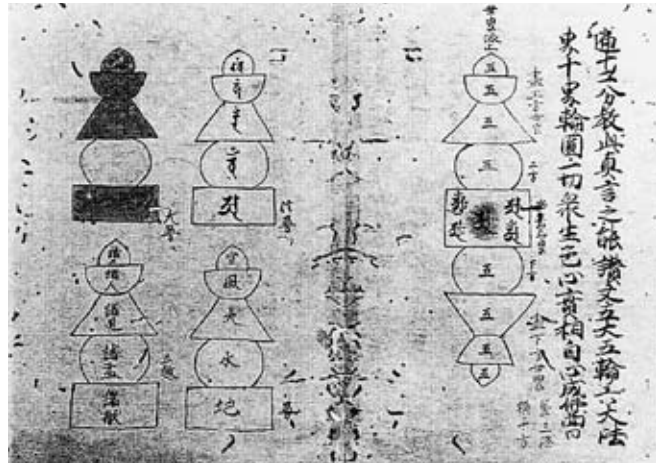


図18

と述べられており、さらに、注解には二つの身体で表されることが加えられている。一方、愛染の下には、「即ち秘密の一印二明の本尊であり、金剛界五部の冥合仏である」と述べられており、さらに「一身二頭」である、という注記が付されている。そして、宝珠の下には、「即ち一印一明の不二の源底であり、両部冥会の靈宝である」と記されている。この二つの図式の間にはさまれた口伝は、「衆生は大癡無明の中に無数の煩惱を生み出し、それは愛と瞋恚（怒り）となって表れる。愛は愛染明王の形をとり、怒りは不動明王の形をとる。諸仏は大定無相の中に無数の仏恵を生み出し、それは智と慈悲の二つとなって表れる。智は不動の形を、慈悲は愛染の形をとる。それゆえ、その二尊はあらゆる徳の原初となる」と述べている²⁹。

『当流最極秘決』では、同じ関連付けの網目が、さらに別の形で表されている。ここでは、五輪塔が描かれ、その下に二つの図形が記されている(図17)。左側は円形で横に「白」と書かれ、右は滴のような形の横に「赤」と書かれている。その両側に、白の側に「六大別相物」という語が記され、赤の側にも「六大別物相」という語が記されている。その真ん中には「所生五臓」と記されているようである。続けて覚鑊の二重の五輪塔と似た「六つ」の形が描かれている³⁰(図18参照)。これらの図は、明らかに、父母、両親から生まれた人間の身体が、即身成仏して、新たな身体として生まれ変わることを表現したものと思われる。五輪塔は、極めて広汎な宇宙論的、儀礼的な意味を含みながら、この胎生学的なプロセスを体現していると言えるだろう。

もう一つの図像上の胎生学論

これらの観念を視覚化する『自心成仏奥不可得義』と題された、もう一つの驚くべき『瑜祇経』の印信がある³¹。これは、おそらく複数の法流で普及していたもので、私はこれまで、立命館大学アート・リサーチセンター所蔵の藤井永観文庫に属するもの(「建武元年(甲戌)七月十二日」という識語がある)と、金沢文庫所蔵のもの(「永仁正年(1293)四月七日」の識語がある)の二つを見ることができた(図19、20)。ここには性別の明らかでない身体が描かれており、その手は金剛界の大日の印である智拳印を結んで、右足を挙

29 『Sam suram 合行秘決』2a-b。阿部泰郎、名古屋大学比較人文学研究室／ロンドン大学 SOAS 合同特別セミナー資料『文観弘真著作の研究』(2008年3月)。

30 『当流最極秘決』真福寺大須文庫蔵第78函13号。阿部泰郎教授の提供された写真による。

31 『密教大辞典』の「瑜祇印信」の項によれば、これは金剛王院流泉海方勝尊相承の瑜祇印信、および金剛王院流泉海方勝円相承の瑜祇印信に属するものと思われる。『密教大辞典』2205a-b 頁を参照。



図19



図20

げたヨーガのポーズ、あるいは『瑜祇経』の根本の種字である𑖀 (VAM) の形に似たポーズをとっている（金沢文庫所蔵の印信は足のポーズが異なる）。この印信の主題である經典のタイトル『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』が朱で注釈されており、その不二性が強調されている。すなわち「金剛峯」は「白帝・智」であり、「楼閣」は「赤帝・理」であり、「瑜伽・瑜祇（瑜／伽・祇と結びつけられている）」は「二帝和合して、識種子その中に託す／是れ人躰即仏身と云うことなり／理智不二なり」と釈されている。

ここには、不動と愛染をペアーにしたのと同じ言語的なコードが用いられている（もちろん、不動・愛染の両明王の名前はここには現われていないが）。注意すべきは、「二帝和合して、識種子その中に託す」という文章は『摩訶止観』巻第七上の「赤白二帝和合して、識をその中に託し、以て体質となす」という文章に似ていることである³²。

ここでもまた性的な象徴が「両極の一致」から生まれ出るものを示しているが、それは宝珠や塔のような象徴的物体によってではなく、行者自身の儀礼的な身体のポーズによって視覚化されている。

しかし、解釈の他のレベルは文観のそれと同様に存在する。テキストによれば、図示された印と明は次のように説明されている。「今此ノ智拳印者、此ノ尊ノ根本印也。大日如来三世常恒恵命不絶義也。凡ノ此普賢如来ニ有リ三種ノ印也。所謂無所〔不至印〕・五鈷〔印〕・智拳〔印〕也。明ノ同ク𑖀 (VAM) 字也。此三種印、同ク名ク塔印也。明ノ同ク五輪ノ義也。秘中秘也。／𑖀 (VAM) 此字ノ五輪形也。小野流（仁海）ノ極秘灌頂也」。

この解釈の後に、『瑜祇経』で金剛界如来が𑖀 (VAM) 字を説く一節³³が引用され、朱で『菩提心論』で「即身成仏」が説かれること³⁴について言及があり、さらに続けて、次のような解釈が示されている。「自身ノ全躰、𑖀 (VAM) 字之形也。故ニ自身即チ種子也。三昧耶形者五鈷ナリ。即チ自身ノ五大法界也。〔中略〕皆是レ生仏不二ノ実教也。〔中略〕秘深中ノ深、非ニ付法ノ者、不レ可ニ伝授也」。

こうした文言は、行者の身体と大日の法身との同一性という、正統的な理解に基づいているが、それを別の語彙を用い、視覚化して表現しているわけである。そこに、中世に広く普及した人間の誕生の過程についての胎生学的な考察いわゆる胎内五位説を背景にした、瞑想の技法の影響を見いだすことも可能だろう。

ここで見てきたテキストは、三尊を一体とする視覚的イメージを用いて、不二の悟りに至るプロセスを具象化して示す言説であると言える。しかも、このプロセスは、行者の身体を儀礼によって変化させ、完全な身体として生み出すものとして理解されている。三尊合行法の最終的な目的は、二元性を否定しないまま、それを包み込む絶対的な不二性を身体のレベルで生み出すこと、と言えるように思う。文観の『御遺告大事』が空海の通常とは異なる二つの図像で始まっているのも、そのような理解の正しさを示しているようである。

32 大正46, 93b8-12頁を参照。

33 「時金剛界如来。復説観波法界普賢一字心密言曰𑖀」『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』大正18, 255b6-9頁を参照。

34 大正32, 572c13-15頁を参照。

こうした身体そのものを変化させ、力を与える、という観念は、世俗の権威を示す肖像（たとえば後醍醐天皇の肖像）にも、あるいは信仰の対象としての本尊像や曼荼羅などの図像にも適用されるようになる。

結 論——視覚インターテクスチュアリティ

ここで見てきたテキストで展開されている言説と関連する、他の図像テキストについて、簡単に述べてみたい。これらのテキストは、時代的にも文脈的にもさまざまだが、にもかかわらず、共通のパターンに従っており、多くは流派的にもつながりがある。こうした図像を見ると、宗派を超えた複雑な影響関係が存在したことが推測されるが、それを詳細に分析するのは今後の研究課題とすべきである。興味深いことに、全体としてみるとこれらはある種の非正統的な特徴をそなえており、視覚的な解釈における驚くべき創造性が発揮されていると言える。終わりに、中世におけるそうした視覚資料をいくつか見ておきたい。

まず、中世神道の図像テキストには、不動と愛染の間に天照大神が描かれているものがある。これらは、いわゆる三輪流神道のテキストであり、少なくとも18世紀まで作り続けられている。三輪流神道は三宝院流の影響を受けていると考えられることも、興味深い点である³⁵（図21、22）。

また、日蓮の著作の中に、有名な『不動・愛染感見記』というものがあり、そこでは不動と愛染がそれぞ

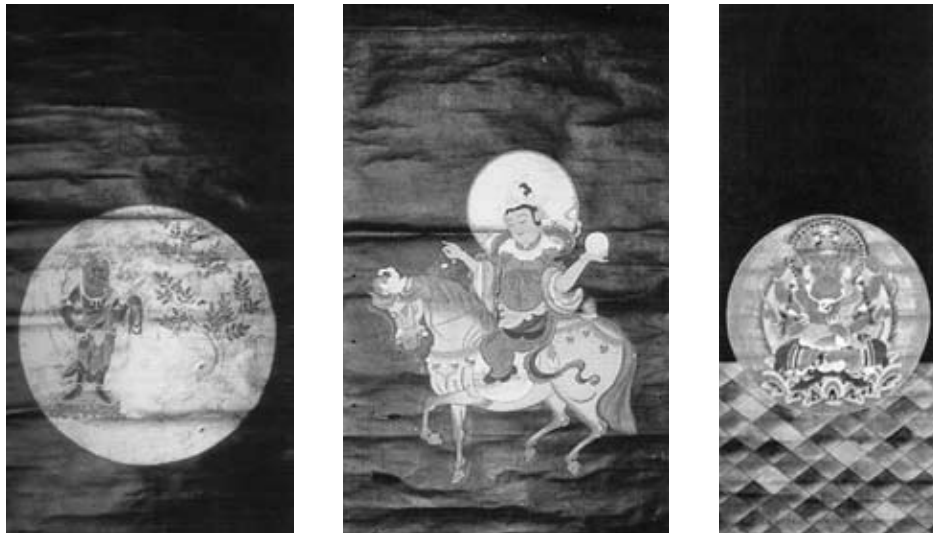


図21



図22

35 この問題に関連する両部神道のテキストと図像については、2007年4月26～29日のコロンビア大学における中世神道についての学会での筆者の発表、“Duality and the kami: Reconfiguring Buddhist notions and ritual patterns”を参照されたい。



図23



図24

れ月と太陽に関連付けられている³⁶(図23)。このテキストは私が三尊合行法に興味をもつようになったきっかけである。この二明王の図像は、これまで見たものよりさらに異相である。ここでは、二明王はペアーの形になっていて、三尊形式で描かれてはいないが、時代が下った14世紀の資料では、これとちょうど同じ形の二明王が三尊形式で表現されているのを見ると、日蓮の図像も如意宝珠を中心とした観想のプロセスと関係しているのかもしれないと思わせる。ここで参照されるのは、宇治の三室戸寺の室町時代の摩尼曼荼羅である³⁷(図24)。図の中心には、宝珠殿に安置された三弁宝珠が置かれ、宝珠殿の上に火炎の光背に包まれた五輪塔が建っている。上部の不動と愛染の間の中央に置かれているのは、三面六臂の菩薩形の尊格で、左右の手に宝珠を載せ、また別の左右の手でもっとも不思議な要素である日輪・月輪を掲げている。

この菩薩は、曼荼羅の中央に置かれたのが宝珠であるので、如意輪観音かとも思われるが、知られているいかなる観音の図像的特徴にも適合していない。この菩薩が何を表しているのかという問題は、なお謎として残される。

さらに、日蓮の文字曼荼羅、いわゆる法華経大曼荼羅は、中央の法華経の両側に不動と愛染の種子が配されており、これも三宝院流の三尊合行法の考え方に近く、影響されているのかもしれない³⁸(図25)。

こうした非正統的な図像の一つとして、文観によって描かれた謎に満ちた後醍醐天皇の肖像を挙げるこ



図25

36 『昭和定本日蓮聖人遺文』第一巻、身延、身延山久遠寺、1989年、16頁を参照。

37 奈良国立博物館編、特別展図録『仏舎利と宝珠』2001年、66番、93頁参照。

38 例として、京都の妙蓮寺蔵、日蓮写(1272)法華経大曼陀羅を参照。

もできる³⁹ (図26)。これは、研究者によっては天皇の権力を表す像だと言われているが、実際には、瑜祇灌頂という儀礼を通して得られた「完全なる身体」を表現する図像と考えることができる。この肖像は、天皇が文観から瑜祇灌頂を受けられた時の姿を表すものと言われており、儀礼が成就した形をイメージ化したものと言える。それゆえ、そこには天皇個人の姿と同時に、儀礼によって完成される行者一般の完全なる身体が表されているとも言える。この後醍醐と同じ印を結んだ空海の像が存在し、水原堯栄氏はこれを「瑜祇灌頂大師」の像であると述べている⁴⁰ (図27)。このようにして父母、すなわち両親の「赤白二帝」から生み出され、世俗の属性を持ったままの肉体が、儀礼の遂行によって聖なる完全なる身体、すなわち崇拜の対称となる身体を獲得するのである。

これらの図像を、前に見てきたようなテキストと関連付けて分析し、より広い、インターテクスチュアルな文脈で理解できれば、たいへん興味深いことがわかってくるだろう。

先に見た写本類は、どれも文観とかかわっており、文観が彼の帰依者であった後醍醐天皇の力を増強し、支持することを目的に著わしたものと考えることができる。しかし、先に分析したように、それらのテキストは、そうした政治的な目的だけでなく、あるいは何よりもまず、ある教義的、儀礼的な言説を展開するものであり、それは真言宗の歴史の中で、画期的な意義を持っていたと考えられる。なぜなら、真言宗の中で主流だった両部曼荼羅に基づいた二元的なパターンが三元的なパターンによって置き換えられ、新しい教義と儀礼の体系が生み出されているからである。こうした展開に、台密の「三部」のパターンがどのような影響を与えていたのか、今後の大きい課題の一つである。また、そこで見られたような行者の具体的な身体への強烈な関心をどのように位置付けることができるか、さらには、より広いアジアにおけるタントラの発展とどのような関係があるか、ということも、重要な問題である。いずれにしても、これらのテキストは、中世密教の中で、非常に根本的な新しい観念の展開を示しているもので、今後より深く研究されなければならないものであるといえよう。



図26

39 藤沢市清浄光寺（遊行寺）蔵。南北朝時代。

40 水原堯栄『弘法大師影像図考』図12と79～83頁参照。



図27

謝 辞

論文の日本語化にあたり御助力を賜りました彌永信美氏、また貴重な真福寺等の聖教資料をご提供下さいました阿部泰郎教授に、深く感謝申し上げます。